

〈いま〉の亡霊化と反覆可能性——ジャック・デリダにおける汚染と決定の論理——

工藤 顕太(早稲田大学/日本学術振興会特別研究員)

「幽霊について、さらには幽霊に向けて、幽霊とともに語らなければならない。すでに死んでいるにせよ、あるいはまだ生まれていないにせよ、そこに、現前的=現在的に生きていない他者たち、もはやあるいはいまだ存在しない他者たちへの尊重をその原理において認めないどのような倫理や政治も——それが革命的であろうとなかろうと——、可能であるとも、考えられるとも、正しいとも思われぬのだから。」(Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilée, 1993, p.15.)

いわゆる「政治 - 倫理的転回」以降、デリダの議論において亡霊 (spectre、あるいは幽霊 fantôme、回帰霊 revenant) という戦略素は極めて重要な位置を占めることになる。哲学的な、あるいは政治・倫理的な言説には不似合いなものと思われもするだろうこの魅惑的な形象は、その実デリダが初期から思考してきた様々な論点 (フッサール現象学における現前性の脱構築、言語における行為遂行性と反覆可能性、アリストテレスからハイデガーにいたる時間論におけるアポリア etc.) からの力線と呼び込むものであり、それゆえの理論的な重厚さと多様さを備えている。本発表では、「政治 - 倫理的転回」の前後を問わずデリダが一貫して思考している時間の問題、より具体的には、〈今 maintenant〉と〈現在=現前 présent〉をめぐる議論に焦点を当てる。この作業において私たちは、初期 (1960 年代後半から 70 年代前半) のデリダの理論的な仕事のなかに、のちに亡霊の形象を立ち上げることになる複数のモチーフを見出すことになるだろう。

デリダは『声と現象』において、フッサール現象学における現前性の脱構築を試みている。この試みの要は、フッサールに議論における〈私〉と〈現在〉という審級の純粋な自己同一性・均質性・単一性の内破である。『声と現象』で前面に押し出される〈現在〉と現在ならざるものとの汚染関係 (contamination)、生きた〈私〉の表象と死への関係といったモチーフは、「署名 出来事 コンテクスト」や「有限責任会社 a b c…」において、とりわけ反覆 (反復 - 他化) 可能性という戦略素を介して広く言語一般 (デリダの言葉によればエクリチュール、痕跡、マーク) にまで浸透してゆく。この浸透はコードという決定審級の失墜やコンテクストの全面的な不安定化といったかたちをとる。また「ウーシアとグランメー」においては、〈今〉というものが必然的に標定不可能であり、このアポリアが形而上学の歴史に還元不可能な仕方できまどっていることが精緻に論じられている。

遡及的に、あるいは錯時的に——すなわち亡霊というモチーフを送り返ししながら——前期デリダの著作を読み直すとき、上に挙げた時間論や言語論におけるアポリアや決定不可能性、汚染の論理は、後期の亡霊論や憑在論 (hantologie) の導入を必然化する理論的素地として理解できる。私たちはまず、これらを差延や代補といった脱構築思想の中心的な概念装置と結びつけつつ、その基本構造を明確化する。そしてそのうえで、この構造がいかにして亡霊というモチーフと結びつき、こうした結びつきがどのような政治 - 倫理的意義を持つのかを、後期デリダにおける〈決定 décision〉の問題という観点から明らかにする。